

新體制と全體主義

奧 江 順 德

聖戰既に四年、今や、我國は世界的大動亂の渦中に於て、肇國の大理想に還り、國體の本義を明徴にし、肇國の大精神たる、天皇歸一、萬民翼賛の國民的信念の下に、個人主義を打破し、高度國防國家體制を組織し、大東亞新秩序を建設し、進んで、世界新秩序の確立に寄與せんとして、内治外交の諸般に亘つて新體制樹立に努力し、既に、その中核たる國內新體制に於ては、新體制準備委員會の慎重熟考による決議により、着々その完遂に向つて協心戮力邁進せんとして居る。外交新體制に於ても、世界歴史に重大意義を齎らす日獨伊三國條約が九月二十七日締結調印せられた。

その中心理念が我が國體の精華を顯現すべき我國無比の新體制樹立に在つて、他の主義思潮によつて制約せらるべきものでない事は勿論であるが、現代世界に指導的地位に立たんとする全體主義の思想を除外しては到底理解し難き幾多の點の存することを觀する。

大凡そ、如何なる時代にも、必ずや、その時代に指導的地位に立つ思想があつて、其時代の凡ての思想は、消極的なるか、積極的なるかの差こそあれ、何等かの影響を蒙つて居ることは否定出來

ない事實である。

二十世紀は、正に、個體觀念の執着を脱却して、全體觀念の核心より出發せんとする思想傾向にあると概言することが出來ると思ふ。然も、眼を一度吾人の眼前に展開しつつある、世界歴史の大轉換に轉ずる時、そこには、我國の支那事變を通じて一貫せる東亞新秩序建設の理想があり、ナチス獨逸、フワツシヨ伊太利の躍進による英佛の無殘なる衰退があり、數世紀の運命を振搖する歴史的大變革と共に、世界は、獨逸伊太利を樞軸としてアフリカ、ヨーロッパを含む全體主義的新體制、アメリカ合衆國を中心として南北兩アメリカを貫く金權主義的民主主義的舊體制、ソ聯を指導者とする共產主義的聯邦群、日本を盟主とする皇道的王道的新興アジア國家群の四大構成に成熟せんとするの趨勢にある。然も、現代世界の對立は之れを單なる舊勢力に對する新興勢力の爭覇戰、若しくは、人種的爭覇戰と見るべきでなく、文化戰爭、即ち、自由主義對全體主義の思想戰と見るべきであり、ここに歴史的大轉換の重大意義を包藏すると思ふ。

我國の皇道精神の發揮が、全アジアを完全に英米佛ソの壓迫より解放されたる東亞共榮圈確立の理想を着々として實現しつつある事實と、獨伊全體主義國家が幾多の困苦を排除して飛躍的大發展を遂行しつつある事實とは、今世紀の華として各國民等しく刮目して凝視して居る處である。従つて、全體主義に就ては、我國に於ても多大の關心を喚起し、各方面に亘つて旺んに論議せられ、日

常用語にも、全體又は總べて等の文字が盛んに使用せられて居るが、未だその適切なる定義定らず全體主義とは何ぞ、皇道主義と全體主義との本質的異同を如何に了解すべきか等幾多の熟考すべき重要問題が存して居る。

全體主義なる言語はおそらく西洋の全體國家 (Civ. totale Staat) の政治的原理に聯關して、我國に用ひられたるものと想像せらるるも、十九世紀的なる個人主義、即ち之れを全體主義に對する對句として書き直す時は個體主義と對蹠的に考へらるるものであり、個人主義に對する反動思想として發展したるものと考へて大過なきものの如く思はれる。此の意味に於て、全體主義の外貌を明瞭ならしむるには一應個人主義の内容を検討する必要がある、個人主義の破綻として批判せらるべき根本的缺陷に正に全體主義の發足すべき指標ある事を知り得るのである。

然らば、個人主義とは如何なる主義なるや。簡單にその内容を論ぜば、十九世紀的なる個人主義は、ベンサムの「一人は唯だ一人として計算せらるべく、何人も二人以上に計算せらるべきにあらす」の示すが如く、精神的自足せる絶對個人のみを政治の指標として認める政治的原理である。即ち、絶對個人を第一義的存在として、かかる個人が機械的に集合したるものを社會とし國家と爲した。従つて、個人こそそれ自體に爲すべき使命を有するも、その機械的集合體たる社會國家はそれ自體何等の目的を有たず、ただ自足的個人の幸福なる生命を保障する必要上一種的手段として個人

相互契約の上に社會國家を構成するに過ぎないと爲す。然も個人主義の第一義的存在とする個人は何某と云ふ具體的人間に非ずして抽象的に觀念されたる個人格たりし點に重大缺陷を藏して居る。

個人主義の特徴としては、個人の獨立、個人の自由、個人の平等を擧ぐる事が出来る。即ち、個人は獨立的人格なるを以て何等他より制肘侵害を受くべきものに非ず、各自は社會に於て自由平等に人生を享樂すべき權利を確保する。社會國家は個人の幸福を増進せしむるに役立つ限りに於て個人に對し存在の價値がある時まで極論せらるるに至つた。この思想が政治に表はれば民主主義となり、議會政治政黨政治として運用せられ、多數決の形態を以てその表決と爲す。經濟に表はれば資本主義的自由主義的搾取經濟となり、自由競争裡に個人資本の擴大を競ひ、遂には弱肉強食の大修羅場を展開するに至る。かくして、個人主義は自由なる個人が各自その權利を追求して止まぬ處遂には鬭争の歴史を繰返すの止むなきに至り、貧富の懸隔甚だしく、階級鬭争激化し、一個の富者の門前に多個の貧者の無慘なる餓死者を見出さんとするの狀勢を呈するに至り、全然、個人主義の理想たる個人の獨立、自由、平等に相反したる慘めな現實相を示すが如き大破綻を暴露し來る。

かかる個人主義の自家崩壞に直面して、その反動として擡頭し來つたものが社會主義である。社會主義は、之れを大別すれば、空想的社會主義と科學的社會主義の二種がある。空想的社會主義は社會貧富の懸隔甚だしく、富者の華麗なる享樂生活の影に、多數貧者の悲慘なる生活あること、階

級闘争の益々激甚を加へ行くの地獄相に處して、各個人の徒らなる權利主張を放棄せしめ、利己的追求を排除せしめ、社會全體の幸福を第一義となし、相互扶助、共存共榮の美德を發揮することによつて、如上の悲惨なる社會相を轉換せしめんとした。之れに對し、科學的社會主義はかかる横暴極りなき資本主義者を相互讓合の精神の如き優しき道德を以て説得することは實に百年河清を待つが如きものである。飽くまでも、階級闘争を煽動激發して資本主義に挑戦することによつて破壊の後に、自から來る歴史的必然性に基く建設を謳歌すべきであると論じて居る。之れを更に一步激越に極論づけしものが共產主義であると概言し得る。

然れども、吾人の熱求する處は眞の建設である。血腥き慘澹たる破壊の道程を通さざれば建設なしとせば止むを得ざるも、眞に人類の自覺によつて、破壊の損害を少しくしつつ、然も、偉大なる建設を爲し得る良策ありとすれば、それこそ、我々の希求して止まないところである。ここに、國家社會主義の一形態たる全體主義の價值と魅力とを見出すのである。

全體主義は、全體はそれ自らにて考へられ、又存在する自己因そのものにして、個體はその光と命と、理由と價值とを全體に依つて附與せらるると爲す。個人主義が個人を絶對自足したる者として、全體に先行せしむるに反し、個人を極めて不完全なる者となし、全體の中に於てこそ個人は完成せられ、全體は個人に先行するものとする。

凡そ、二つの者の結合關係に、集合體と協同體との二種を考へ得る。集合體は獨立自足なる個人が自己利益の追求と他を利用せんとする事によつて結合せらるる關係であり、協同體は日本家庭に於けるが如く、成員相互の精神的雙關の基礎に於て、その成員の人格完成を全ふし得ると爲す。前者が個人主義的國家であり、後者こそ、全體主義的國家の重視せんとする國家形態と謂はねばならぬ。

かく、全體主義は、全體は部分に先行し、部分は全體の一分肢として他部分と精神的に雙關する事によつてのみ自己を完成せしめ得ると謂ふべく、全體こそ個體的生命の創造原理であるとなす。従つて、全體主義の特徴とする所は、個人主義の獨立、自由、平等なる個人觀に對して、相助、奉仕、正義なる個人觀を確立し、精神的相關、心的融合の協同體を以て、個人は互に全體に奉仕し、各自異なる任務に専念することに於て全體に寄與すると同時に、各自を完成せしむる社會正義の觀念に徹底せしむるものである。即ち全體主義的世界觀の堅持による弱肉強食の搾取體制の放棄を要求する。

一兩主義の特徴が、政治上に表れば、自由主義政治に於ては政黨政治となり、多數決制を採用すれど、全體主義政治に於ては、多數決制の觀念を根底より覆がへし、協和主義による獨創的協議精神を昂揚して、衆議統裁なる協和翼賛體制を完成せんとする。國家的結合に表れば、前者は自己利益

と他人利用をその結合の理由となせども、後者は相互の精神的雙關による愛情と犠牲とを結合の理由となさんとする。經濟的方面に表はれば、前者は自由主義的經濟を立脚とするに對し、後者は統制經濟即ち計畫經濟をその基調とする。道德方面に表はれば、前者は權利の主張を要求するに對して、後者は義務の遵奉を重視する。等、あらゆる方面に於て對蹠的表現を採る傾向ありと考へ得る。

今や、我國は、世界歴史の一大轉換期に直面して、滅び行かんとする個人主義自由主義の末路と、正に時代の指導精神たらんとする全體主義の進展とを眼前に見せつけられつつ、東亞新秩序の建設と、これが根幹をなす國內新體制樹立の聖業に邁進せんとして居る。我國新體制の必然性、新體制の指標の奈邊にあるやは髣髴として吾人の心眼前に顯現しつつあるの思ひがする。

然れども、吾人の正に戒心すべきは、徒らに、滅び行く個人主義に惡罵を放つのみにして、その過去の功蹟をも没却し去らんとする事と、徒らに、榮え行く全體主義萬能を謳歌することによつて、その將來の成果を盲信せんとするの愚である。

全體主義研究の第一人者たる、シユパン教授は、「全體主義は個人主義の反對に非ず。個人主義が個別者を全體者より優越したるものとなす社會觀、國家觀であるならば、全體主義は單に全體者を個別者よりも優越したるものとなし、かくて個別者を無價値のものとなすの理論に非ず。實際は全體主義的に考へた場合でも、個別者は原則的にその不滅の内容的價値と、その道德的自己規定と

を保持して居る。」と論じて、全體主義の個人觀に對する淺見者の迷路に陥ることなきを指摘して居る。

思ふに、社會現象は自然現象と異り、具體的な血あり肉ある人間を要素として進展するが故に、社會現象の必然性は萬民之を認識すると同時に、萬民の目的を完遂せしむる事が緊要であり、吾人自らが先づ、人間の本性に立還るの反省と、その反省に基く躍進とを必要とする。

昭和十四年一月議會に於て、平沼首相は、個人主義全體主義の抽象的觀念に捕はれたる本質的缺陷を指摘し、日本の指導的原理たる皇道との異點を明瞭にして、「我が皇道は凡べての者をしてその處を得せしむる。天下の一人もその處を得ざる者なからしむると云ふのが、わが皇道の神髓である。自分は考へる。全體のことも考へねばならぬし、また、個人のことも考へねばならぬのでありまして、全體のために個人を犠牲にするといふ考とは全く違ふのであります。」と論じて居る。

我等、日本國民は、この岐路に立つて、正に、皇國精神を基調として、大和思想に徹したる循序執中の精神、換言すれば、兩主義を兩翼として動かす支點たる中道信念の確立を最も緊要とする。

中道精神とは、舊秩序の世界觀人生觀を脱脚し、人間の本來性に立還り、佛教の教ふる、無我の大精神に徹したる、自覺覺他行圓滿の大覺によつて、一即一切、一切即一、個にして全、全にして個、各個にして然も全の實現なる玄妙なる相即圓融の大信念に基脚し、一君萬民の國民的信念に安

住して、八紘一字の肇國の國是に則り、一億一心、以て大政翼贊の臣道を自己の持場を通して全ふし、着々として力強き完遂の第一步を大地に踏みしめねばならぬ。かかる信念なきる基礎を確立してこそ、新體制の樹立顯現の成果を克ち得ることが出來ると確信するものである。